

魯迅の生涯

石二歌著 金子二郎 大原信一訳

東方書店

訳 者：

金子二郎（かねこ じろう）

1905年生

1926年 大阪外国語学校中国語科卒業

大阪外国語学校，同大学教授，学長を歴任

現在，大阪外国語大学名誉教授

中国語，中国文学専攻

大原信一（おおはら のぶかず）

1916年生

1937年 大阪外国語学校中国語科卒業

現在，同志社大学教授（76年春から在外研究のため上海に滞在中）

中国語，中国文学専攻

魯迅の生涯

1976年6月20日 初版第1刷発行

訳 者 金 子 二 郎
 大 原 信 一

発 行 株式会社 東方書店

東京都千代田区神田神保町 1-3

電話 294-1001（代） 振 東 9-36500

石二歌著

金子二郎

大原信一訳

身辺の生涯

東方書店

鲁迅的故事

石一歌

上海人民出版社出版

(上海绍兴路5号)

1973年1月第1版 1974年11月第2版 1974年11月第3次印刷

魯迅は中国の文化革命の主将であり、かれは偉大な文学者であつたばかりでなく、偉大な思想家、偉大な革命家であつた。魯迅の背骨はもつともかたく、かれには奴隸の根性やへつらいの態度がいささかもなかった。これは植民地、半植民地人民のもつとも貴重な性格である。

魯迅は文化戦線で全民族の大多数を代表して敵陣に突入した、もつとも正しい、もつとも勇敢な、もつとも断固とした、もつとも忠実な、もつとも情熱的な、空前の民族英雄であつた。魯迅の方向こそ中華民族の新文化の方向である。

ル
迅
東

目次

戦いの筆をとる	9
辛亥革命のあらしの中で	19
春雷第一声	31
青年の争奪戦	41
水に落ちた犬をこっぴどく叩く	53
血債は必ず同じもので償わなければならない	67
平民学校へ講演に行く	77
初めて広州へ	85
講演の前に	95
反革命クーデターの中で	107
資本家の走狗の肖像	119
白色テロ下の誕生祝い	131

秘密の書庫	141
怒りの詩 ^{うた}	149
魯迅と日本の青年	159
三たび胡適を打つ	169
書物を買う人	181
革命根拠地の形勢図	189
眉を横たえて冷やかに敵の刃にたいす	195
反孔闘争の最前列に立つ	201
獅子身中の虫	215
共産党員が最も信頼した同志	227
心は延安に	235
木刻画の話	243
病床の戦い	253
一人たりとも許さない	269
最後の巡歴	277

目 次

永遠に人民の心の中に生きる 285

付 録

上海・南京克復慶祝のあちらがわ（魯迅） 295

新しく発見された魯迅の逸文（余秋雨） 301

詩・無題（魯迅） 324

魯迅先生略年譜 329

訳者あとがき 337

題字 内山嘉吉
装幀 柴田安啓
見返しの図 上海の内
山書店所在図・店内図
内山嘉吉筆

戦いの筆をとる

雪堂無計此神矢風雨
如磐周故園寄意寒
望蒼不察我以我血薦
軒轅

二十一歲時作五十一歲時

寫上時年未及六十也 魯也

魯迅（本名、周樹人）は、中国の偉大な革命家、思想家、文学者であるが、青年時代にははじめ医学を学んだ。

魯迅が医学を学んだのは、愛国の熱情から出ている。

一八八一年九月二十五日、魯迅は浙江省紹興で生まれた。

魯迅の少年時代には、中国はまだ清王朝の統治下にあつて、かれの故郷紹興も、封建的で立ちおくれた空気がとても濃厚であつた。魯迅が十三歳のとき、父親がながの大病を患つた。かかつた「医者」は、みな金もうけがねらいで、奇妙な処方箋ばかり書いた。四年たつと、家の中の品物はもうほとんど売り払われてしまったのに、父親の病氣は、日一日と重くなり、とうとうこれらの「医者」の手にかかつて死んでしまった。なんという「医者」だ！ なんという「薬」だ！ 中国のどれだけ多くの人が、そうしたいかさま師の手にかかつて命を落とし、封建制度が生み出した迷信と立ちおくれの中で死んだことだろう。

このような暗黒な現象が、魯迅のまわりにいつも発生し、封建社会にたいするかれの不満をますますつのらせた。

十八歳のとき、魯迅は救国救民の真理を求める気もちを抱いて南京へ行った。南京で勉強している間に、魯迅はブルジョア民主主義革命の思想を紹介した多くの書物と、自然科学の若干の著作に接して、国を救うには、維新を實行する以外にない、維新を實行するには、外国に学ぶしかない、という考えを抱くようになった。同時に、かれはまた翻訳された日本の歴史書を通じて、西洋医学が日本の政治改革に、ひじょうに大きな推進作用を起こしたことがあるのを知った。そこで若い魯迅は医学を学ぼうと決心した。かれの当時の考えは夢にあふれていた。医学をしかり学べば、自分の父親のように誤診された病人を救うことができるし、政治改革にたいする人民の信念を強め、中国を改造する目的を達することができると思つた。

魯迅はこんな純真な考えを抱いて、日本の仙台医学専門学校に入つたが、在学中に、青年魯迅の美しい夢を打ち砕く事件が起こつて、そのため、かれはとうとうメスを捨てて、戦いの筆をとるようになった。

一九〇五年秋のことである。魯迅はすでに医学専門学校の二年生であつた。ある日の午前、かれは教室で細菌学の授業を受けていた。教師はスライドで、細菌の形態と活動状況を映して見せながら、講義を続けた。魯迅は精神を集中して、画面を見たり講義に耳を傾けながら、また真剣にノートをとっていた。教師の講義が終わつたが、まだ時間があまっている。教師はいつものよ

うに時局にかんするスライドをすこし映した。始まると、銀幕に映し出されたのは、またしても、終わって間もない日露戦争の光景であった。

「またか！」魯迅は銀幕を眺めながら、眉をひそめた。

ちかごろ、この二つの帝国主義国が勢力範囲の奪いあいのために、中国の領土で汚ない戦争をしているのを画面をとおして見せつけられるたびに、かれは限らない憤りを覚えるのだった。

銀幕いっぱいには日本軍国主義の戦争騒ぎがひろがっていたが、魯迅は逆にもの思いにふけていた。歴史のひとこまひとこまがかれの頭の中をかすめて通り、痛ましい画面がつぎつぎにかれの目の前に浮かび出た。帝国主義者の鉄蹄が祖国の土地を踏みじり、侵略者の銃口が祖国の人民に向けられているのに、清王朝はつぎつぎに国権を失い、国を辱かしめ、不平等条約が一つずつ首かせのように中国人民の首を締めあげてゆく。魯迅の胸は憤りと苦痛で締めつけられた。

「万歳！」ひとしきり狂おしい声が、魯迅のものの思いを打ち切った。目をすえて画面を見ると、目を刺すような場面がいきなりまぶたの中にとびこんできた。刑場の中央には、ロシア軍のためスパイを働いたといわれる一人の中国人が縛られており、まもなく日本軍に銃殺されようとしている。そして、そのまわりを一群の中国人が取り囲んで見物している。スライドはわざと大げさに、いわゆる「落後民族」の無神経な表情を宣伝していた。

教室の中に、ひとしきりひそひそささやきが起こった。

魯迅の胸はどきどきおどри、全身が火で焼かれるようであった。かれはもうこれ以上見ておれなくなり、書物をもってさっさと立ちあがった。こぶしをぎゅっと握りしめ、憤然として教室を出て行った。

魯迅は下宿に帰っても、気もちは一向に落ちつかなかった。手にふれるまま、机の上に積みあげた文学書のなかから外国の小説を一冊とりあげて読んだ。ふだん、授業が終わって帰ってくる、すぐ東欧や北欧の被圧迫民族の文学作品をむさぼるように読むのが常であったが、この日は一字も目に入らなかった。書物を投げ出して、ごろりと寝ころび、両手を枕にして、天井を見ていたが、心中とても重苦しかった。スライドの画面と、軍国主義思想であふれている騒がしきあげしくかれの胸を突き刺した。

とつぜん、ふすまがあいた。

「おい、食事の時間だぞ。どうしてまだ寝ているんだ、からだの具合がわるいのじゃないか？」
「何でもない、ちょっと横になっていただけだ。」

魯迅はからだを起こして、入ってきた二人の日本人の学生に答えた。

二人の学生が出て行くと、魯迅はまた机に向かった。じっと目をこらして窓の外を眺めてい

た。空はまっくらで、いくつもの大きな厚い雲のかたまりが、心の中につきこんでくるようだった。風が出て、路傍の木から黄色い葉がひらひらと落ちた。二、三年前東京で作った詩^二が、ふとかれの脳裏に浮かびあがった。

靈台無計逃神矢、 靈台 神矢を逃る計無く

風雨如磐闇故園。 風雨 磐^{いわ}の如く故園を闇くす

寄意寒星荃不察、 意を寒星に寄するも 荃^{せん}は察せず

我以我血薦軒轅。 我れは我が血を以て 軒轅^すに薦めん

（大意：わが心は愛国の熱情をおさえることができないのに、祖国の天地は風雨はげしくくらやみに閉ざされている。冬の暗夜の星にわが思いを托してもわかつてくれる人はいないが、わたしは自分の血を祖国に捧げよう。）

一陣の苦痛がかれの心を襲った。内憂外患が続いて人民は苦しみに喘いでいる。どうしたら風雨の中にただよう祖国を救うことができるだろうか？

魯迅はぼんやりと窓のそとのでこぼこ道を眺めていた。道は果しなく続き、かれの物思いも果しなく続いた。

「ああ、考えてみれば医学はいちばん大切なものではない。自覚のない人は、よしんば体がどんなに頑健でも、帝国主義者に縛られて首を切られるだけだ。たださらし者にされたり、無神経な見物人になるだけだ。中国を改造するのにどんな意味があるのか？」

しばらく考えて、魯迅は心中こう断定した。

「最も大切なことは、人びとの精神を変えることだ！」

「しかし、結局どういう方法で人びとの精神を変えるのか？」

魯迅は家を出て、でこぼこ道を足にまかせてあるいた。かれは数年来読んだ多くの被圧迫民族の文学作品を思いだした。その中の反抗の叫びと戦いの熱情は、どんなに自分の心を励ましてくれたことだろう。また、多くの民族の歴史において、文学作品が人びとの愛国の熱情と反抗の精神をかきたてたあまたの事実を思いおこした。

かれは目の前が明るくなるのを感じた。

「文芸は人びとの思想意識を変えるよい武器ではないか！」

空いっばいたれこめていた厚い雲に、突然切れ目ができて、明るい青空が顔をだした。

仙台医学専門学校の近くに小山があり、ふだん魯迅はよくここへ散歩にきた。かれは考えごとをしながら、いつの間にか山のふもとへきた。そして山道に沿って登って行った。